

「食べる」ことの社会学に向けて

——摂食障害者の語りにおける食事の実践と知識の関わりから——

筑波大学大学院 佐藤知菜

1 目的

本報告の目的は、「食べる」という行為がどのように達成されているかを問うことである。近年、食に関する社会学的研究の数は増加し始め、特に健康やリスク、農業、コミュニティ等との関連で食の社会学的意義が語られるようになってきた。しかし、そもそも「食べる」という行為が具体的にどのような過程を経て達成されるかについては明らかにされていない。「食べる」という本来生理的な営みが、何故社会学的研究の対象となるのかは、社会問題と結びついているという点にのみ準拠していると言わざるを得ない。そこで、本研究では、とりわけ摂食障害当事者の自身の食事と科学的知識との関係に関する語りに着目し、以下の通り研究を進めた。

2 方法

今日の日本において、「食べる」という営みは日常的に様々な知識に取り巻かれ、行われている。摂食障害者は、ともすれば、食に関する知識や規範を無視し、食事のコントロールを全く失っているように見えるが、だからこそ、「食べる」という行為の達成過程、特にその食事の実践と知識との関係性を問うにあたって非常に重要な事例である。

語りの分析に際しては、食に関する知識と、その知識への意味づけ、そして実際に為された行為を腑分けし、その相互の関係を Anthony Giddens の再帰的近代論 (Giddens, 1991=2005) を活用しつつ分析を行った。

3 結果

明らかになったことは以下の 3 点である。第一に、摂食障害者がむしろ食に関する知識に非常に敏感であり、また、健康的な食という規範に意識的であること。第二に、日々の食事の実践と科学的知識が掛け合わされ、当事者にとっての新しい価値や意味づけが創造されていること。例えば、「健康」のためであったはずの知識が「不健康」な状態を維持するために活用されていた事例があった。第三に、科学的知識を取り入れることによって、身体の客体化が起こっていることである。例えば、食べ物もカロリーや栄養素の数値に還元して捉えられ、自身の胃袋はそれを入れるために容器であると捉えられている事例である。

4 結論

以上の結果から、「食べる」という行為は、日々の食事の実践と知識との結びつきによって創造される価値や意味づけに規定される行為として捉えられるのではないかという仮説を得た。もちろん、摂食障害者の語りから分析を行っているため、「食べる」という行為全ての達成過程に一般化することは難しいが、実践と知識との結びつきが「食べる」という行為の達成過程に影響を与えていた可能性があることや、それが食の社会問題化とつながっている可能性があることは明示できた。

文献

Anthony Giddens, 1991, *Modernity and Self-Identity Self and Society in the Late Modern Age*, Stanford University Press (=秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳、2005『モダニティと自己アイデンティティー後期近代における自己と社会』ハーベスト社)